

## 結論

以上第 I 部で論じたようにアイスキュロスの文体は比喻と複合語による形容語句が特徴であり、それは措辞を豊かにするばかりでなく、それが刺激する想像力は中途半端な舞台装置に劣らぬ視覚効果をもたらし、登場人物の内心の動きや舞台外の出来事も明瞭に描き出すことができる彷彿性を備えていることが明らかになった。彼はこの措辞の力を借りて自由自在に神々と英雄の活躍する世界を人間の世界に重ね合わせ、数世代にわたる一族の争いや伝令の報告する戦闘の場を現前させることができた。観客は耳慣れぬ言葉の組み合わせにあるいはとまどいまた違和感を覚えながらも、詩人の紡ぎ出す想像の世界に引き込まれていったことだろう。この意味で彼の創作技法は十分に成功を収めたのであり、悲劇の草創期にあってそれを第一級の芸術にまで高めた功労者である詩人の名に恥じない。

しかしアイスキュロスが神話上の登場人物の運命を描くことによって観客に訴えかけたのは単なる神話世界の解釈の問題ではなかった。彼がそれらの人物を通して主張したのは『オレスティア』においては正義の執行を人間の恣意から公正な司法の手に委ねるべきことであり、またプロメテウスとダナオスの娘たちのように権力者の横暴に屈せず自由な抵抗の精神をつらぬくことであった。そして繁栄のさなかにあっても驕慢に走らず謙虚で慎ましい生活態度を忘れぬことを「正義の讃歌」では歌い、また真の勇氣は外面の大言壮語には現れず、むしろ敬虔で謙遜な態度に伴うのであった。

これらの徳目は舞台の上の人物だけに要求されるのではなく、実は政治経済の繁栄の頂点に達したかのように見える祖国アテナイの市民たちにも詩人は訴えかけているのである。これは現実の問題としてトゥキュディデースが『歴史』の中で指摘している「正義」の一面なのでこの論文の中で取り上げておいたが、氏族的な「イエ」においても「都市国家」においてもこの一方的で独断的な正義の主張は深刻な問題を生じている。貧富の差が階級の争いを生じ、市民間の権力争いが外国の勢力と結んで内紛を引き起こしたまた対外的な緊張をもたらす傾向が見られ始めていたが、これらは富と権力に驕る精神のもたらず禍いであると彼は洞察していたのである。

事実アイスキュロスは次第に権力に驕り、同盟国を従属国のように扱い始めた祖国を見限るようにしてシシリアに赴きかの地で客死する。自由のために一市民としてペルシアの大軍と戦い、生涯それを誇りにしていた詩人にとってその後の祖国の行動は正視しがたいものに写ったことであろうし、鋭敏な詩人の魂はそれを早くから見抜きまた舞台から警告していたのだろうと思う。